度、気分、感情＝もののあはれ）であるというわけである。問題であるのは、その後、現代にいたるすべての『古事記』注釈書がこの宣長の訓みを無自覚に踏襲しているということだ。

なお、詳細については呉哲男「文字の衝撃」（『書くことの文学』所収）で論じた。

小特集・古代文学研究の現状と展望

景と心——古代歌謡研究展望——

佐藤和喜

古代和歌・古代歌謡の景の表現と心の表現について、野田浩子は、景は神の心の表れであり、表現される心はその景によって生成するものであると説き（『万葉集の叙景と自然』一九九五）、猪股ときわは歌の心は外から憑いてくるものとして神の側のものであると説いている（『古代文学』26　一九八七・三）。一方、森朝男は、景の表現と心の表現との関係は「〈つなぎ〉の関係にあるのではなく、〈重ね〉の関係にあ」り、両者の関係の由来は「二人以上ないしは二群以上の歌い手の混成的な歌い重ねにあった」と論じている（『古代和歌の成立』一九九三）。こうした野田・猪股と森の見解を総合すれば、景の表現は神の世界を眼差す人の立場の表現であり、心の表現は神の世界に転位した神の立場の表現ということになろう（拙稿・『国語と国文学』一九九五・五）が、近藤信義はこれを音喩論の立場から検証して、転位には音が関っており、景が放出する音が歌い手を憑依状態へとリードしてゆくことを論じている（『音喩論』一九九七）。この近藤の考え方は記紀歌謡、とりわけ記歌謡を捉える上で重要である。例えば、女鳥王の記68「雲雀は　天に翔る　高行くや　速総別　鷦鷯取らさね」は、雲雀の雄と雌、神のヲトコとヲンナの関係を表す景を外部から眼差す歌い手が、その景に響く雲雀の頻りなる声に巻き込まれて神の側に転位し、神のヲンナとなってヲトコへの激情を表すという形になっている。また、宇治稚郎子が大山守を水死せしめた時に歌った記51「aちはや人　宇治の渡りに　渡り瀬に　立てる　梓弓まゆみ　bい伐らむと　心は思へど…い伐らずそ来る　a′梓弓まゆみ」について、a・a′の「梓弓まゆみ」を死者大山守とする通説では物語に矛盾することから、最近、居駒永幸が、a・a′は神樹の下での男女の出逢いという表現様式を踏まえて大山守とその妻のゆかりの木である「檀」を表し、bはその「檀」を伐らないということで大山守を鎮魂しているのだと述べている（『日本文学』二〇〇〇・六）が、この居駒説は従来の説と同様、記51に響いている声を無視している。記51は大山守を騙し討ちにした宇治稚郎子の歌であり、そこには宇治稚郎子とその兵の敵意と嘲笑の声が響いているのであり、したがって、bの心の表現は大山守を嘲笑うものでなければならな

い。とすると、「梓弓まゆみ」は何を表すのか。ここで注目すべきは、大山守が水に落ちた時、宇治稚郎子の兵達が一斉に立ち上がって弓矢を構えたと語られていることである。a・a′は弓矢を構える兵達を表すのであり、bはその兵達に反撃することができなかった大山守の無念を表すと見られるのである。歌い手は宇治稚郎子の兵達を表す景を眼差しているうちに、死者に憑依されて大山守の心を表しているということだが、その転位はa・a′に響く宇治稚郎子達の嘲笑が導くのである。歌い手はその嘲笑に巻き込まれて大山守の無念を表し、そのことが宇治稚郎子達の一層の快哉を表すことになるのである。記51が大山守鎮魂の意味を持つとすれば、大山守に対する残酷さにおいてである。記歌謡の音は、記歌謡の異常さ・激情を露にするのである。倭建の死を悼む后達の記34「なづきの田の　稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　野老蔓」にしろ、后達が倭建の死骸にまとわりつくのを表す第三者的な景の表現に終始するが、そこに響く后達の哭泣が后達の、更には倭建の激情を表している。

小特集・古代文学研究の現状と展望

文字の世界の向こうへ

真下　厚

シドニーオリンピックの競技がテレビで盛んに放映されていたとき、画面から聞こえてくるニッポン、ニッポンという声が耳についた。「日本」はニッポンなのか。だが、ニホンともいわれる。この国では、いま、文字のみが定められ、その音は制度的に定められているわけではない。人の名も同じだ。出生届の際、役所の戸籍担当者が細心の注意を払うのは文字についてであって、その訓みではない。名前の音は戸籍には記載されないのだ。このように、我々は、黙読を常とする社会にいるだけでなく、法的にも文字のみを定める文書主義の世界にあり、そうしたあり方を当然であるかのように受けとめてきた。

しかし、古代以来長く、文字には声が分かち難く結びついていた。また、記された文字は僅かなものであり、その向こうには厖大な量の声のわざが広がってもいた。

古代において、とりわけ韻律あることばが生成されるとき、それは声を主とするものであった。これが文字に記されて享受されるような場合でも、人々は特別な、あるいはくぐもった声で音声化しながら享受した。

今日、その文字の面については精緻な研究が重ねられてきたが、それに比して声の側面については、残念ながらこうした段階にまでまだ及んではいない。もっとも、それは、声は復元できず、不可知のものであるため、確かな研究をうち立てることがむずかしいからでもあろう。また、日本の口承文芸についての研究そのものが声の表現を文字に置き換えることによってなされがちであったことも間接的には関わっていよう。